



## 狭山市文化団体連合会 初代会長 小高誠太郎を偲んで

当文団連の初代会長で顧問の小高誠太郎氏が、本年4月21日にご逝去なさいました。

小高さんは、平成11年9月の設立時から平成18年度まで8年間にわたり会長を務められ、3つの自主事業の立ち上げや、理事会等の運営面で会長として指導力を発揮され、文団連の活動の基盤構築に多大な貢献を為されました。

平成19年に会長を退任された後は、顧問として当会の活動に参加され、ご自身の趣味の成果発表として芸術祭へ絵画作品を出展するなど、正に晩年を文団連とともに歩んでこられたと言えます。

今も文団連の事を温かく見守って下さっている小高元会長のお姿やお声を思い浮かべつ、今後も一層狭山市の文化向上と市民文化の発信を目指していきたいと思ひます。

心よりご冥福をお祈り致します。

狭山市文化団体連合会 会長 小川忠史



小高初代会長退任慰労会にて

狭山市文化協会を発展的解散にし、新たな連合体の立ち上げが決まった時、文化協会の大室会長は辞意を表明された。途方に暮れ、ある方に相談し紹介されたのが小高氏だった。お話しをさせて頂いて快諾を得、「狭山市文化団体連合会」初代会長にご就任頂いた。

氏は寡黙で、我々が、ああでもないこうでもない、新しい団体の有り様や、事業の立ち上げを、夢いっばいに語り合っているのを、口を挟まず、静かに聞いておられた。しかしひとたび、その方向に動き出すと、全てを担って、どっしりと存在して下さった。当初誤解から、市議会で、文団連の存在意義を疑うような採り上げられ方をした事が有った。氏は「我々は、粛々とやるべきことをやってみましょう」そう仰った。今でも涙が出るほど、感動した言葉だった。

第一回市民芸術祭の企画公演では、様々な傘下団体が一つの舞台を創り上げるコラボ公演をイメージしていたが、費用面への心配から、氏が異を唱えた。私は泣きながら訴えた。その後寄付も有り、公演は大成功したが、途上の氏の在り方に再び感動した。一度異を唱えても、その後しっかりと方向を見定めると、率先して、土台となり風よけとなって推し進め、その後「コラボレーションが文団連の特徴です」という言葉が、売りのキーワードになったほどだ。何て人間力の優れた方だ…。氏のお蔭で文団連は、揺るぎない、狭山市の「文化団体の連合体」に成長した。我々は孫悟空のように、その掌で走り回り、沢山の心地よい汗をかき、多くの事を学んだ。

小高さん、たくさんたくさん有難う！ 深謝 拝

狭山市文化団体連合会 前会長 横山千枝子(美衣)